巻頭言

学びの対話的実践へ

佐藤（さとう）　学（まなぶ）

あるカルチャー・スクールでの体験である。「勉強」と「学び」の違いについて受講者に尋ねてみた。教師たちに同種の質問をすると、回答は恐ろしく画一的である。「勉強＝強制された学習」「学び＝主体的な学習」というのが、教師たちが抱いている「勉強」と「学び」の観念である。しかし、カルチャー・スクールの受講生の回答は千差万別であった。しかも、一つひとつが「お見事」という回答なのである。

たとえば、ある受講者は「勉強は終わりを告げるもの」「学びは始まりを準備するもの」と回答した。なるほど、学校の「勉強」はいつも「よくできました」のスタンプで終了する。しかし、社会生活における学びは新しい人や事柄との出会いの連続であるし、いつも何かの「始まり」を準備している。他の受講者は「勉強は前へ前へ進むもの」「学びは行きつ戻りつするもの」と言う。これもすばらしい。「勉強」の時間は一方向的で不可逆的であり、「学び」の時間は可逆的で循環的である。

私自身の回答も示しておこう。私は「勉強」と「学び」の本質的な違いを「出会い」と「対話」の有無に求めている。「勉強」は何者とも出会わず何者とも対話しない活動である。それに対して「学び」は新たな世界と出会い、新たな他者と出会い、新たな自分と出会う活動であり、世界と対話し（世界づくり）、他者と対話し（仲間づくり）、自己と対話し（自分づくり）続ける活動である。学びはいつも内と外に開かれているのである。

■プロフィール　1951年広島県生まれ。東京大学大学院教育学研究科教授。学校教育学。ナショナル教育アカデミー（米国）会員。日本学術会議第一部副部長（2005年～）。日本教育学会会長（2004年～）。主な著書に『学校の挑戦－学びの共同体を創る』（小学館）、『教師たちの挑戦』（小学館）、『教育改革をデザインする』（岩波書店）、『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波書店）など。